昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十九年七月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通一八三号）

慈光

目次

「教行信証」大心海釈（一）……近角常観……（1）
仏智不思議をそのままに……橘地亀次郎……（9）
善財童子の求道……福島政雄……（15）
仏かねてしろしめしてたのもしさ……花田正夫……（19）

第十六巻　第七号

『教行信証』大心海釈（一）

近角常観

一

信に知りぬ、至心信楽欲生、其の言は異なると雖も、其の意惟れ一なり。

何を以ての故に、三心すでに疑蓋雑わること無し。故に真実の一心、是を金剛の真心と名く。金剛の真心　是を真実信心と名く。真実の信心には必ず名号を具す。名号には必ずしも願力の信心を具せざるなり。

是の故に論主、建めに　我一心と言えり。又　彼の名義の如く如実修行相応せんと欲するが故にと言えり。

凡そ大信海を按ずれば、貫歩、緇素を簡ばず、男女老少を謂わず、造罪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず、行に非ず、善に非ず。頓に非ず　漸に非ず。定に非ず、散に非ず。正観に非ず、邪観に非ず。有念に非ず、無念に非ず。尋常に非ず、臨終に非ず、多念に非ず、一念に非ず。唯是れ不可思議不可説不可称の信楽なり。喩えば阿伽陀薬の能く一切の毒を滅するが如し。如来誓願の薬は能く智愚の毒を滅するなり。

開講以来、長々お話する三信釈の、いよ〳〵最後の御文であります。直に御文に就いてお話するに

「信に知りぬ。至心信楽欲生、其の言は異なりと雖、その意これ一なり」

先日来種々なる入信の実例によりてお話する如く、至心のまことは、我々には一つも有ること無い。我々の方よりまことと思い、こしらえている仏ならば、仏までが我々のこしらえ物にすぎぬのであります。

ところが今我々、そのまこと無き様を哀れみて、飽くまでその者にまことで向つて下さるが仏の至心のまことである。汝のまことに出来ぬが哀れで、それでその者が見捨てられぬとあるまことが、如来廻向のまことなのであります。

信楽もまた我々自分の方で信じ喜ぶことは出来ぬ。その仕て見ようなき浅間しき私の心なれども、大悲の仏は、その信じられぬところがいよ〳〵哀われと、この者を飽くまで信じ、飽くまで善くして下さる。その飽くまで信じ、飽くまで善くして下さる仏の御心を頂けば、我々の心中に初

めてお見捨てなきお慈悲の有難やと、信楽の一念が開発し来るのである。

欲生も我々こちらより浄土に参りたいなどいう心は無けれども、仏より「我が国に生れんと欲え」と遣る瀬なきお呼びかけにより、初めて我々の心中に、有難い思召しが頂かれるとなるのであります。

で、至心、信楽、欲生の三心、言葉こそは、かくそれぞれ異つてあるが、意はこの仕て見ようなき御同ようを、救おうとある御真実一つにて、頂くこちらの手前よりいう時は、三信いずれを頂いても広大な御親切に疑い晴れ、有難いと頂く一つである。至心のまことを頂いても、信楽の慈悲を頂いても、乃至欲生の呼び声を聞いても、三心何れを頂いても、広大な御真実に多生曠劫の疑いの闇晴れ、有難いと頂かせて貰う一つとなるのであります。で、「至心信楽欲生、とその言は異なりと雖、その意はこれ一つなり」…

「何を以ての故に、三心すでに疑蓋雑ること無し。故に真実の一心、これを金剛の真心と名く。金剛の真心、これを真実の信心と名く」

上来席を重ねてお話する如く、至心信楽欲生の三心共に、飽くまで慈悲ばかり、恵みばかりの、一点疑いの雑らざる清浄真実のお心である。故にひとたび、この広大の御心に接すれば、如何なる疑い深き者も、その疑いの根本を取られ、かほどまでの遣る瀬なきおまことに出会えば、如何に不まことの者も、その不まことの根底を断たれて、仏のまことに溶かされて仕舞う。恰も酸き柚子の液の、砂糖に混ずれば、忽ち一味の甘さとなり、また中心まで真黒の炭団が一点火が着くなり、忽ち中まで火となる如く　広大の仏心に接するなり、何人もただ有難や〳〵の喜びばかしで、一点疑蓋の心の雑るということがない。

故に三心何れを頂きても、かく頂きた味いは、一念疑蓋雑ることなき真実の一心である。而してこの「真実の一心これを金剛の真心と名く」……金剛の、火にも焼かれず水にも溺れぬ真実の心とは、即ちこの一心が金剛の真心である。「金剛の真心、これを真実の信心と名く」……而して、この金剛の真心、これ即ち真宗でいうところの如来廻向のまことの信心とはこれである、とであります。

二

次に

「真実の信心には必ず名号を具す。名号には必ずしも願力の信心を具せざるなり」

昔よりよく言われる名高き御言葉であります。

さてかく広大の如来真実の塊りはと会えば。即ち一南無阿弥陀仏の名号の外に無い。故にこの広大の真実の届いて下された一念には、

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて。念仏申さんと思いたつ心のおこるとき、即ち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり」

と、その一念には必ず念仏申さんと思い立つ心が起る。故に「真実の信心には必ず名号を具す」……信心頂いた者が念仏の出ぬということは無い。必ず南無阿弥陀仏々々々々々と念仏は真実信に附きものなのである。

なお「真実信心には名号を具す」と仰せられ「名号を称す」とないのは、たとい名号が口に現われぬかて、信の一念はちやんと念仏が具わつてあるのである。故に第二念には必ず南無阿弥陀仏々々々々々と口に念仏が現われて来なくてはならぬのが、真実信の味いであります。

ところが、唯口に南無阿弥陀仏々々々と称するも、唯口に念仏が称えられるだけで、それで真実の親心が頂けたとは言えぬ。真実信の称名は、私共の胸中を知り抜かせられこの者を飽くまで見捨てぬとの広大の御親心が知られたところで、初めて思わず口に浮んで下さる念仏であつて見れば、この親心が頂かれず、唯口先ばかりで称うる念仏では、まだ本当に願力の信心が頂けたとは言えぬのである。故に「名号には必ずしも願力の信心を具せざるなり」……されば南無阿弥陀仏の広大のお恵みは、口に念仏を称えさせて頂くことが主にあらず、肝要は唯この願力の信心一つを頂かせて貰わねばならぬ事であります。

勿論、今言う如く、既に「和讃」にも

信は願より生ずれば念仏成仏自然なり

と仰せられ、真実の信仰には、必ず自然に念仏が具わるのでありますが、その称うる念仏は、我々が声を出して南無阿弥陀仏々々々と、口に称うる念仏であるか。又は第十七願の念仏……即ち仏より我々に対して、南無阿弥陀仏と名乗りを揚げて下された、名乗りの念仏……即ち我々が念仏の謂われを聞き開いて、南無阿弥陀仏々々々と、声に喜びの念仏が現われるまで、それまで我々に言い聞かせて下された所謂、「聞其名号」の名号であるかと、これにつき古来色々言う人があるのであるけれども、称える前と後と念仏に二つあるべき訳はない。

初めの席で詳しく申した如く、親の手織りの着物の喩で云うならば。着るべき着物と、着たあとの着物と、着物に二通りあるべき筈は無いのである。唯今は同じ着物を身に親しく着てから言う迄に過ぎぬのであります。

ところが親がこの仕て見よう無き乱暴者のために、態々この一枚の手織りをと、御成就下された親心の塊りの南無阿弥陀仏の着物であつて見れば、真実信心の親心が頂かれた一念には「有難や」とその親の着物を着、念仏を称えるに決つて居るのである。

否、着、称えずには居られなくなるのである。

ところが、今言う如く、着物は着ながらも、真に親のそれを御成就下された親の思召しは頂かずに、唯徒らに着て居る者があつたり、又親しく身に纏いつつも、「こは親のこしらえて下された着物であるから着なくてはならぬ」と無理に我が心を押えつけて着て居る者があつたりする。で、それでは何程親の下された着物を着、念仏を称えて居ても何もならぬ。それでは何程念仏が口に現われてあつても、願力の信心を具した名号とは言われぬのである。真実信心の称名は、心に親の遣る瀬なき思召しが頂かれた処で、初めて自然に口に現われて下さる念仏である処で、即ち仏恩報謝の念仏なのであります。

これは「大経」本願の文の上より申しても「至心信楽して我が国に生れんと欲え」との、遣る瀬なき親の仰せが頂けた一念には、必ず次の「乃至十念」の念仏は、これに附き添うて来る可きなのである。これは真実信心の上からは、必ず南無阿弥陀仏々々と、上尽一形、下至一念の念仏は是非あらわれなければならぬのである。さりながら何程一生念仏しても、それが肝要の親の親心を頂かず、唯口先ばかりの念仏では、まだ真実信心を頂いた称名とは言われぬのであります。

三

次は

「是の故に、論主建に我一心とのたまえり」

さてかくの如く頂き来れば、如来の広大なる三心の御誓いも、弥々きわまるところは、それ程までにお見捨て無き御真実の有難やと、頂く真実の一心の外に無い。この故に天親論主は先ず、何を措いても、

「世尊、我一心に、尽十方無碍光如来に帰命し奉る」

と、先ず初めに一心とお示し下された、ことである。これは言うまでもなく、この三信釈は、

問う、如来の本願はすでに至心信楽欲生の誓を発したまえり。何を以ての故に、論主一心と言うや。

と。先ずこの天親菩薩の一心の言葉で不審を起し、それより漸次三信の思召しをお説き下されたのである。それ故、今はいよ〳〵その一心の問を受けて、三信即ち真実信心の一心であることをお知らせ下さる結びの御文なのであります。

「又彼の名義の如く、実の如く修行し相応せんと欲するが故に、とのたまえり」

こは天親菩薩の五念門の中の讃歎門のお言葉を「論註」の中の御文よりお挙げ下されたのである。

讃歎門とは、即ち南無阿弥陀仏々々々と、広大の仏名を称うるは、即ち仏徳を讃歎し奉るのである。今の天親菩薩

の「帰命尽十方無碍光如来」の啓白の御言葉も、即ちこの仏名を称する讃歎のお言葉に外ならぬのであります。

処が今言う如く、唯徒らに仏名を口にし、文字に表わすばかりでなく「彼の名義の如く、実の如く」……「彼の名義の如く」とは、彼の南無阿弥陀仏の名に具わる意義の如くである。かの仏名にそなわる意義の如く、真実仏名の意義にかないて名号を称えるのでなくては何にもならぬ。

その名号に具わる意義とは、即ち蓮如上人の「御文」は再々善導大師のお言葉を御引用下されて

南無というは即ち是帰命、亦是れ発願廻向の義なり。阿弥陀仏と言うは即ちこれその行なり。この義を以ての故に必ず往生を得。

と。即ち南無阿弥陀仏の六字の中には、既にかくの如きの意味が籠りてあるのである。又その意味を「和讃」に

十方微塵世界の　念仏の衆生をみそなわし
摂取してすてざれば阿弥陀と名けたてまつる

即ち南無と帰命する一念に、その念仏の衆生を観そなわし、その者を摂取して捨てて下さらぬ親様故に、阿弥陀とは申し奉るのである。

即ち一念南無と遣る瀬なきお心を頂きつる上は、その者を光明中に摂取して、飽くまで捨てぬとのお心のままが南無阿弥陀仏の名号なのである。

で、その広大な名号の意義の如く、その広大の思召を有難うと頂いて、南無阿弥陀仏々々々と称うる名号でなくてはいかぬ。

又「実の如く修行し相応せんと欲するが故にとのたまえり」――実の如く修行し相応するというも、矢張り同じである。彼の名号の意義の如く、如実に頂き、如実に相応して、称えさせて頂く念仏である、とであります。

四

なおここの処の御文は　昨年度の講本の処に、一度詳しく出てある御文である。そこは甚だ大切なるお言葉があるのであります。それは次の如くあるのであります。

「云何が不如実修行と、名義不相応と為す。謂く如来は是れ実相身なり、是れ為物身なりと知らざるなり」

甚だ話が細かくなるのでありますけれども、全体仏とは如何なる方であるか。即ち今日、真宗でいう、法性法身、方便法身の阿弥陀仏とは、如何なる人であるか、と言う真宗における仏身論を言いますに、かく「如来は是れ実相身なり、是れ為物身なり」とある。

これはどうかと言うに、既に申した事なれども、法蔵菩薩が広大なる願を発して阿弥陀仏となり、我々をたすけて下さるという、その法蔵菩薩はそも〳〵如何なる方かと言

うに、よくキリスト教の人などは、仏教の仏は、法蔵菩薩なる一個人が段々大きくなり、発達して成つた仏であるという。成る程一応は聞えるようでありますけれども、その法蔵菩薩が当り前のお方ではない。「唯信鈔文意」には

「一如よりかたちをあらわして方便法身と申す。その御すがたに法蔵比丘となのりたまいて、不可思議の四十八願をおこしあらわしたまうなり。云々」

即ち一如法界の部より、態々姿を現わして広大なる本願をお建て下されたが法蔵菩薩である。法蔵菩薩は一如法界の仏境界、即ち本覚明了の広大なる境界より、我々衆生を救わんために、態々姿を現わし下されたる、所謂久遠実成阿弥陀仏にてましますのであります。

で、今「如来は実相身なり」とお示し下さるは、ここのところをお知らせ下されたのである。而してその広大なる仏境界より現われ下された訳合いは、その広大なる仏境界は、色も無く形もましまさぬ境界にて、そこの味いは、我々凡夫には極楽に参らせて貰わぬことには分らぬ。又それが我々に分る位なら、如来のお救いに預ることはいらぬのである。これを譬えて言えば、永劫の澄みたる月影の如く、我々凡夫の思慮に絶えたる、永遠に覚めたる広大の悟りの境界なのであります。

で我々の信ぜさせて貰う仏は、この悟りの境界の仏でない。こは我々の想像するだに及ばぬ超絶した広大の境界なのである。ところがその広大なる仏境界より、我々此方の方を御覧下さるのである。その広大の酔の醒めたる境界より、我々三毒の酒に酔い狂える様を御覧下され、その永久に覚めたる境界より、我々眠り伏せたる有様を御覧下さると

「あゝ如何にもいつまでも煩悩にほだされ、無明の酒に酔い伏してる奴が可哀想である」

と、すなわち、

無明の大夜をあわれみて　法身の光輪きわもなく
無碍光仏としめしてそ、　安養界には影現する。

即ち、広大なる覚めたる境界より見ると「如何にも、その酔い眠れる様が可哀相である」と、即ち遣る瀬なき大慈大悲心が現われ、ここに一如法界の都より、態々法蔵菩薩と名乗りをあげて、広大なる悲願をお立て下されたが法蔵菩薩でましますのである。で親鸞聖人は「和讃」に法蔵菩薩と言う代りに、直ぐ阿弥陀仏と仰せられてあるのであります。即ち「大経和讃」に

弥陀成仏のこのかたは　いまに十劫ときたれど
塵点久遠劫よりも、　ひさしき仏とみえたまう。
南無不可思議光仏、　饒王仏のみもとにて、
十方浄土のなかよりぞ、　本願選択摂取する。

かく一如法界の妙境界の有様は、到底我々には分らぬが、その一如法界の境界より、法蔵菩薩と姿を現わし、ここに選択摂取の広大なる本願を御成就下されたが十劫正覚の阿弥陀仏にてましますのである。

その一如法性の広大なる境界における仏が、即ち法性法身、而してそれより我々迷える者、悩める者、無量の毒にあてられて居る者を御覧下されて、それが可哀相で仕ようがなく、ここに遣る瀬なき大慈大悲が現われ、法蔵菩薩と姿を示し、広大なる救いの本願を御成就下されたが、方便法身のお姿なのであります。而してそは何かというに、自分さえ悟つてあれば、外の者はどうでもよい、というのでは真の悟りの人では無い。自分が悟りの境界にあればあるだけ、弥々迷いの者が哀れでしようが無いのである。我々にしても自分の苦が取れて見ると、あと振りかえり、自分と同じ苦しみに在る人が気の毒でしようがない。人生に苦の経験して見ると、他の人の苦しんでいるのが、骨髄まで察しがつくのである。

で今その如く、その広大なる境界より御覧下さると、十方衆生、如何にも苦しみ悩んでいるのが可哀想であると察しがつく。でその広大なる大慈心より現われて、法蔵菩薩の本願はあらゆる総ての十方衆生、……有学の者も、無学の者も、富める者も、難儀な者も、すべての者が迷うているのが可哀想で仕様が無く、遂にそれより、無上殊勝の大願をおこし、

「弥陀誓いを超発して、広く法蔵を開き、凡小を哀れんで選んで功徳の宝を施すことをいたす。〈教巻〉」

そのすべての者を救い遂げずば正覚を取らぬ、という、若不生者の誓いの下に、長々御修行の結果、現われて下された仏が、即ち方便法身の阿弥陀仏の御姿である。であるから「如来は是れ為物身也」……物（衆生）のためのお姿であるというはここである。それ故、我々十劫正覚の阿弥陀仏ということは、この私が可哀いためだという外、言えぬのであります。これは先程の、親の着物の喩えで言えば、親の手織りの着物は何か、即ち私が着るための着物なのである。私ということを言わずに、着物の意味を言えというたとて、言えやせぬのである。何故この着物は、ここの処に襟があり、袖があるのであるか。そは私に頸があり手がある為に、その頸、その手にきちんと着させるために、一々四十八願が皆もうけさせられてあるのである。

で、かく私が可哀いばかりに法性法身より、方便法身のお姿が現われさせられた。即ち法性法身の尽十方無碍の広大なる境界より、尽十方無碍の阿弥陀如来のお姿が現われさせられた、となるのであります。

五

ところで、以上申すことは、之を仏陀の講釈と思われたら大変間違うのである。これみな阿弥陀仏のお慈悲の有様に外ならぬのであります。

即ち仏の名号、仏のお姿そのままが、今云う如く丸々私の為のお姿、名号に外ならぬのである。であるからその広大のお心を我々に初めて知らされた時には「今まであだやおろそかに思うて居たが、それ程までに仏はこの私の為に御苦労下されてあつたのであるか」となる。ここはこの間申した姨捨山の話にする時は、即ち親が最後に「汝の為に道々木の枝を撓め、草を結び道しるべして置いた故それを辿りて誤たず帰れ」と言われた一念には「今迄親が帰るための道しるべと思うて居たに、私が帰るための道しるべであつたのであるか、忝けなや、申訳無い」となり、ここを「歎異鈔」のお示しには、

「弥陀の五劫思惟の願を案ずるに、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と。

即ち「私が五逆十悪の悪人であればこそ、そのため五劫永劫の長の御苦労をさせしめ奉つたのである」と分るはかく広大の思召しで向つて下さる仏の仏たる親心を知らせられるから分るのである。

かく罪業の私のために、五劫永劫の苦労までして、飽くまで捨てぬとの広大の仏にてましませばこそ、この罪業深重の悪人が、やす〳〵お救いにあずかれるのであります。でその広大の仏身であることが知れたのが、即ち

「如来はこれ実相身なり、是れ為物身なり」

と分つたのである。処がこの肝腎のとこが頂けて無い者が即ち不如実修行と名義不相応とであると、あります。

処が近時青年の人などには、よく、

「仏が分つたら信ずるも分らぬから信ぜられぬで困る」

と言う人がある。分つて頂く信心でなく、この遣る瀬なき親様なる事が頂けた時が、即ち信じたのである。設えば、電灯がパッと点火した時には、最早や分るも分らぬも無い。その如く、仏のお姿や形や、道理理窟で分らねども、この者を見捨て給わぬ御親切の有難やと頂けた一念には、それらのすべてが、そのまま丸々頂かせて貰えるのである。これが即ち「如来は是れ実相身なり、これ為物身なり」と知れたのであります。

未完

× × ×

仏智不思議をそのままに

橋地龜次郎

私は加賀国石川郡山島村下島田の藤原と申す家で生れたのであります。都合あつて壮年に、金沢市の橋地の養子となつたのであります。回顧しますれば生家実家共ども浄土真宗でありまして、皆能く仏法を喜ばれて居りました。

私だけが今日まで、如何なる訳か、真から念仏申す気が起らざる計りでなく、別に何の心配にもなりませんでした。私の父は私の九才の時に死去、十二才の頃まで母の手一つで育てられました。

私の生家は先祖代々村の用係やら、用水委員等の役を勤めましたので、子供心にも人の為に尽すのが、人生の一番よき事と考えたので、百姓家を捨てて筆算の業に従事することになりました。

明治二十六年入隊の時まで、石川県税務署に奉職、二十三年から、二十六年までの間、能登の飯田と申す処に在勤中、医師で佐野春庵と申さるる漢学の先生に、多少孔孟の学を教わり、親以上に可愛がられましたのは、何より仕合せでありました。

私は立身出世を神に祈り、十六才の時から徴兵検査の時まで、酒を口にせず、婦人と親しまざることを神に誓つたのであります。明治二十六年徴兵検査の際、幸にも農家生れの私が不思議にも名誉なる近衛兵に選抜せられました。これは全く神の御蔭と信じ、何の考もなく自ら進んで現役に志願し、十二月に近衛歩兵第二聯隊に入営しました。二十七年日清の役には上等兵で出征、軍曹で無事凱施。三十七年日露の役には特務曹長にて出征。少尉に昇進せしも、武運拙なく負傷の結果、内地へ帰還の運命となつたのであります。

日露の役で、三十八年三月三日、奉天の会戦に、幸か不幸か敵の小銃弾で脳天を貫かれ、人事不省にあること、約一週間、すでに火葬になるべき筈の処、忠実なる従卒、立花竹松君の親切なる看護により九死に一生を得て、今なおこの世にあるは、唯々不思議と申すより外はありません。今ここに立花君の高恩を謝すると同時に、又無限大慈の洪恩を感謝せずには居られません。

今申した如く、私の傷はもつとも重傷のため戦地病院に居ること約一ケ月、夢の如き心地にて内地に送還、三十八

年五月、赤十字病院に収容せられ、故軍医総監橋本国手、並にドイツのベルツ博士の診察の際、橋本国手の御言葉にも「君の負傷はとても医薬の力にて助かるべきものに非ず全く神仏の御助けによるものなれば、其点を大いに喜び、決して不平を云うべからず」とのことなりしも、その時は唯空事の如く考え、何等感謝の念も起らざりしに、何たる幸福ぞや、今は広大無辺のお慈悲に触れて、唯々有難く感謝の念にたえぬようになりましたのも、皆これ如来の賜ものと喜ぶ次第であります。

当時私の身体は、とても素のように軍人を勤められませんので、三十九年十一月、特別の恩典にて中尉に栄進の上過分の年金と恩給とを頂き、退役の身となりました。

思えば、私は九死に一生を得たる幸福者、尚又戦地にあつて戦友に誓つたことも思い出で、堅い決心をもつて今後は専ら廃兵、戦死者、孤児の慰籍に尽さんものと思立ち、四十年の三月、友人、乃村少尉と両人にて、軍隊酒保の雑食商人となり、その利益の幾分を廃兵院と陸海軍将校婦人会教養所の孤児諸君へ寄附の目的で、先ず毎週一回宛御菓子等の寄附を為し来りしも、乃村氏は既に四十二年限り寄附を断念せられ、私は今なお継続して居りましたが、思いの万分の一もその実があがらず、憂慮中、不幸にも大正二年十二月から軍隊の都合により、毎日の販売が一週間一回の販売に改り、そのため大打撃をうけ、寄附ところか、毎月莫大の損害を生ずるようになり、又昨年の秋、店員中四人までチブスに罹り、残らず入院しました。

又その上に私の友人で、某会社を創立した際、多少の株を引受けて居つたのに、友人の無責任により会社は破産となり、困窮の上にも又々その責任を果たさねばならなくなり、重々の不幸にて、日々金銭の欠乏を来し、資財の限りを投げ出しても足らず、去りとて誰一人真に同情する者なく、友人知人に内情を打ち明かしたが、五十歩百歩の話にて、安心も出来ません。

又、易学先生やら、淘宮術等の先生について種々研究しても、根本的に安心の道も得られず、煩悶苦悩に日を暮して居りました時、又々チブス患者の内、我児同様に養成した郷里の人で窪政好と申す十五才の紅顔の少年に死去せられ、我児の愛に引き比べ、その両親の心中が察しられ、唯何となく此時、いささか浮世無常の一点を味い、生死の巷に二度までもこの身を捨てて、大君の為に尽さんとまで覚悟せし身が、斯くの如き些々たる事に突き当り、何たる我身の弱きかと、我心の頼に足らぬことを初めて悟りかくの如き些々たる事に煩悶苦悩するのも、つまり自分の欲を制することが出来ぬからであると考え、自分の身に取つて一番好きな煙草を禁じました。このように多少悟る処もあり

ましたが、とても自分の力で自分の万事を制することの不可能であることを悟り、その時、進退きわまつて、初めて、仏の助けを受けんものと思い立ち、かねて聞き知る郷里の暁鳥敏様について教を乞わんものと、小石川区の浩々洞に参りましたが不幸不在にて大いに失望落胆し、将に帰ろうとすると、「如何なる御用か」との木場了本様のお言葉に力を得て、「仏法を聞かんが為に参りました」旨を申すと、直にお座敷へお通し下され、私の胸中を披瀝申すと、誠に懇切な御話数刻を拝聴し、やや遠方に光明を認むるかの如き感じはすれども、尚物足らぬ心地と申すと、木場様は親切にも夜中なのに、私を本郷の近角先生のお宅へお連れ下さいました。

処があいにく先生は関西地方に御旅行中で拝謁を得ず、空しく帰る途中、大学構内の樹下で木場様から、夜の十時過ぎまで、人生問題やら、御法話やらをお聞きし　帰宅後も、何となく尚物足らぬ心地でありましたが家業に追われて、そのままに打捨ておきたるところ　その後木場様は郷里に帰られ、本年一月の年賀状中に、確たる光明を認められし乎のお尋ねをうけ、今更にその御親切なる警告に驚き、一月七日、かねてお慕い申していた近角先生の御宅へまいり、御面謁を求めたるに、直ちに、先生御自身玄関までお出で下され、まだ何事も申上げない初対面の私に対し、第一に不自由なる私の身体を御覧下さるや

「ドーナサイマシタカ」

との温い御言葉をかけて下さるのみならず、直ちに手を採つて痛わつて下されし御親切に感じ、その時すでに、我理想の仏とは、正にかくの如きお方を申上る事かと信じられ唯々有難く感じたのであります。

招かるるままに御座敷に通れば、自ら座布団までもお出し下され、万事謙譲の御対度と、その円満なる御容貌に接したるその時は、傲慢不遜の私にあつては全く恥じ入り初めて生如来に接したる如き感想が起り、唯なんとなく慕情ます〳〵堪え難くなり、この時、私の胸中全部の苦悩煩悶を先生の前に披瀝したのであります。

その要点は、私は十数年間も軍隊に在て専心奉公の念を以て働き、日清日露両役には身命を陛下に俸げ、日露の役には九死に一生を得て、今は廃兵、孤児の慰籍に尽して居れど、理想の万分の一もその実績のあがらざるを憂えたのであります。又友人その他の者に対し、今迄は充分に道を尽せし様に思つたに、その結果概して面白からず、又私は前にこれという大それた悪事を為したおぼえなきのみならず、自分の今日まで為し来りし事柄の全部が善い事のように思つて居るも、何が故にかくの如く不幸に遭遇するかが疑問であることを申上げたに対し、一々懇切に御教示下さ

れ、殊に先生の御身の上話までも承り、有難く頂いたのであります。

その時お示し下された要旨は、第一自分が助かるべき筈のものなのに他を助けるの間違いであることを指適せられ、第二に、私が善い事と思い居りし事が、皆自己の為なりし事を指適され、今まで人を助けるとか、人の為とか、己が善きことが出来るとかを頼みとせし金城鉄壁も、今先生のお教示によつて、根底より破壊せられ、全く己の立場を失い、今までの全部が間違いであつた事を知らせて頂き、その時よりの立場が一変し、この時すでに空腹に食物を得たかの如き心地して、悠々と先生の許を退かんとするにあたり、先生御自身より、「信仰余瀝」と「求道」雑誌一部を賜り、その後拝聴の結果、いささか信仰の必要は感じたけれど、心中から有難い念仏を称えることが何となく恥ずかしく、且つ意味を解しない念仏は自ら我心を欺く様に思われて、唯なんとなく不愉快に日を暮して居りました。

二月十五日初めて、求道学舎の道場に詣り、先生から、「仏陀の真実」の御法話を拝聴せしも疑の雲晴れず、三月二十一日の土曜日に、九段の教会場に先生を訪ねて、その後の心中に起つた疑点を申上げ、親しく教を乞うたのであります。

その要点は、過日先生から指適して下された通り、過去における私のなしたる所業を熟考する時は、皆これ全く自己のためのみにして、不真実極まる点を自ら覚醒し、大いに慚愧に堪えぬようになつたのであります。又自己を捨てて真実に他人を助けるが如きことは、とても私に為し能わざることを自覚せし時は、今までの事は、全部偽りであつたかの如く考えられ、自分は言行不一致の者なる故に、とても私如きものが仏に助かるべきものにあらずと確信し、如何なる道理によつて助かるべきかが愈々疑問の中心となつたのであります。

然らば私より念仏を唱うれば仏は私を助けて下さるのか、若しも助けて下さるものとせば、私より如何様にはからつてよいのかが心配でならなくなつたのであります。されど私如き何事にも不真実勝のもの、何事も人並以上に疑心の深かき者、名誉心にあこがるるもの、物質的に走り易き者、半慈善的事業の廃兵孤児慰籍の如きもの、果して真実なるかの点を顧み、且つ又清浄の身と成る事の出来ぬこの身は、とても助かるべき筈のものでないと自ら断念し、心中恐れを感じつつあることを、当日の法話前までに先生に申上げしに、

意外にもその点がもつとも可愛いとの如来の真実である、本願である。汝の不実もの、汝の善き事の出来ぬ、清浄になれぬ其の点が可愛いのである。汝が真実であり、善

きことが出来、清浄になれるなれば、かくの如く仏の方で苦しむのでない、との有難きお言葉を頂かして貰いましたが、尚も疑念を晴らすことが出来なかつたのであります。

然るに「利地真実」の御法話を拝聴中、なかんずく、壺坂寺、観音利生記の沢市の女房の真実に感じたのであります。勿論、如来の真実は、これ以上であるから、或は助けて頂けるかも知れぬと、多少安心を得て、教会場を退出に際し、かつて私を仏道に誘致して下さつた、木場了本様のお在京のことを知り、直ちに同氏を浩々洞に訪問し、昨年来の御礼を述べ、なおも法話を拝聴し、退出に際し「清沢先生の信念」と題する一本を贈られ、帰つて一読すると、又々疑念が続出し、そのまま打捨てることが出来ず、三月二十八日の土曜日に、九段の教会場に近角先生の「虚仮と真実」の御法話を拝聴し、いよ〳〵私の行為の一切が不真実きわまることに裏書済みになり、この上は愈々一秒時間も捨て置くことの危険を感じ、翌二十九日は家業の頗る忙しいのにもかかわらず、身上の一大事たる事を家内にも打明かし、取り急ぎ、本郷の求道学舎に詣り、法話前、親しく近角先生の膝下に於いて、仏の誓願は如何なるものなるか、との或信者よりの質問に対し、

仏の誓願はあだかも砂糖の甘きが如し、との先生のお教示を頂き、本願の成立を詮議してまでも頂くの必要もなきかとも考え、唯甘き本願の有難やと信ずればよいのかとも考えられ、なんとなく時機が切迫せしように思われたのであります。

処が本日の御法話拝聴中、如何なる動機の来りしにや、「仏智不思議を信ずれば」のお言葉に気がついて、フトこの身の屁理屈者、強情者、今まで理屈で信ずる気であつたから困つたのだ。自分で信ずる気で居たのが悪るかつた。誠に済まなかつた、この浅間しき私が隔て心もなくなつて唯仏智不思議の有難やと信ずる気になつたのが、これが仏智不思議である。

真実有難やと喜んだ其時は、夢の如く幻の如く、此時如来の方より、能く親心を信じてくれた、これで本望である、安心である、決定である、金剛心を得られたのであると、耳底に響きしその時に、今迄大慈大悲の如来をば、恐れ多くも我々同様に、善きことをすれば助けて下さるのである、こちらより頼めば助けて下さるのであると計り信じていたのが間違いであつたと気付かせて頂き、真に相済まなんだ、永々の間親心を疑つてすまなんだ、御心配かけて相済まなんだと、種々思い詰め、何たる広大なる御慈悲かと、有難く感じた一刹那、総身一時に火がつきし如く、俄に全身発熱し、熱き涙が押流れ、生れて始めての男泣き、外見も恥じず声上げて泣き叫びたる其時に、大慈大悲の如

来より

「かねて汝が心配の、清浄になれぬ、善きことが出来ぬ、隔て心が止まぬ、不実が止まぬとの其事が可哀想だから、永劫の昔より永く苦労して積上げたこの弥陀の本願である、決して心配に及ばぬ」

との有難きお言葉に感泣し、唯不思議や、有難や、何たる幸福の此身かと、喜び勇んで貰い受けた金剛心は、火にも焼かれず、水にも溺れず、私ひとりの賜り物の有難やと思い立ち、その時出でし称名念仏は四十年来の迷の網の打切れて、今より阿弥陀如来の大願船に乗り出したる心地してその嬉しさは筆にも書けず、口にも言われず、何にたとえんものもなく、真実感謝の念仏を唱えさせて下さるようになりましたも、皆これ如来の賜物と思えば、今日の御法話も全く、私一人がためにお開き下されしように思われて、唯々感謝の念に堪えません。

回顧すれば日露の役に九死に一生を得たのも、真に仏のお蔭であることが信じられ、又昨年来、些々たる人生問題に突きあたり、目を醒まして下されしも仏智の不思議。又一月以来善知識の近角先生につき、親しくお教化を蒙りしも仏智の不思議とは申しながら、海山も及ばざる御鴻恩はとても身を粉にしても報ずるもなお足らず。何たる仕合せ者かと、称名念仏申す次第であります。又私を仏道にお誘致下されし木場様、暁鳥様に対しても、篤く感謝に堪えざる次第であります。これも仏智不思議の有難やと感謝の念仏申す次第であります。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

（註）大正三年三月号の求道誌から頂きました。翁はその時四十二歳。昭和三十二年に八十五歳で世を去られました。求道会館を知る人々で、橘地翁を知らぬ人は無い、尊い方でありました。翁の一週忌には柳瀬先生が一文を草して下され慈光誌に掲げました。今度は翁の告白を頂きました。　編者。

◇

生活断片

山村信子

春夕べ　花吹雪して　寂土めく
春寒の　風邪寐に詫ぶる　おい母へ
新樹風　汚穢（おえ）の心を　持てる身も
緑雨終日　詫びたし虚身　夫や子に
露ほろにがし　生あるものの　捨身にて
老眼鏡　笑われてかく　春夕餉（ゆうげ）

善財童子の求道

福島政雄

実際の家庭（告白）

太子は帰つてこのことをお父さん、父王に申し上げる。そうすると父王は大いに喜んで、王位を太子に譲つてしまつて、勝日光如来のところへ行つて、お父さんの方が出家修行をする。こういうことになるのであります。

そして太子は、今度は王になつて、国を治めて、無量の衆生をたすけるということになります。つまり仏法によつてその国がおさめられるということになりました。

こういうのが今の瞿夷女の因縁物語、前の生の物語りであります。この前生物語を終つて瞿夷女が言いますには、その時の太子、増上功徳主というのが別人じやありません今の釈迦牟尼仏であります。その時の娘の母善現は他じやありません。今の母の善目がこれであります、と。

そうでありますからして、仲々そこが面白いのであります。かように善財童子は瞿夷女を善知識として、まことの道、さとりの道をたずねる。瞿夷女は今のような物語をして、そして実は前の生において、貴方からまことの道に誘われていつたのでございますというのでありますから、仲々立派なところであります。

こういうところを読みまして、つまり家庭の中で、むつかしい内にもむつかしいのは夫婦の問題であるということを考えさせられるのであります。親子の問題はまあまあよいといたしましても、夫婦の間は仲々むつかしいと私は感じて居るのであります。

私の結婚などは理想の結婚でなくして、お話すれば甚だお恥かしいことになるのでありますが、私の家内を学校で私が教えました、教え子という関係でありまして、所謂恋愛結婚じやないのであります。両方から染愛を感ずるという風じやなかつたのでありますが、私の方では、これはしつかりしとるな、という感じを持つて居りました。向うでは、これはいい人らしいという感じを持つていたらしいのであります。けれども実際一緒になつてから、もう四十幾年になりますが、そんなにして一緒に暮してみますというと、私の方からは別問題として向うの方からは、この男はこんな男であつたか、という感じがするようであります。それはまあ家庭の中でありますから、その中には色々の苦

しみの問題もあります。そして苦しみを一番深く苦しむのは私よりも、むしろ家内の方であります。

してまあ只今では子供が長い間、十年も、十余年も病気をしたりして居りますし、散々の有様であります。それで何で続いているのであるか。決してこの染愛というような関係で続いているのじやありません。そんなことはとつくの昔に、初めからあんまり無いのでありまして、初めは家内はキリスト教の洗礼をうけて居りました。私は近角常観先生のみ教をうけて、親鸞聖人のみ教に一筋になつたというのでありますからして、第一キリスト教の洗礼まで受けているものが、近角先生のみ教をうけている私のところまで来たというのであります。チイと理屈を云えば、甚だ変なことになるのでありますが、兎に角、決心して来たのであります。

そうすると、私が近角先生のお話を聞きに行かんかというと非常に反感がおこつたそうであります。自分はキリスト教の洗礼をうけて立派な信仰をもつている積りであるのに、今更仏教のおしえを聞く必要がないと思つたというのであります。

それで私がそんなことをいうと反感がおこつて堪らなかつたけれども、まあ夫の言うことであるから聞いて見ようかというようになりまして聞くようになりました。然しただの聞き方じやないのであります。一人で近角先生のところへやつて行つて、仏教というものは何ですか、仏像を拝んだりして偶像崇拝ではありませんか、と云つたそうであります。すると近角先生が、そんな低級なことを考えているのか、とウンとお叱りになつた。それからは仏教というものには何かあるんだな、ということを感じますようになりました。

その後、家庭問題で、私の妹で、それは早く亡くなりましたけれど、その妹とのいきさつで非常にこまつたことがあつて、家内は死ぬる決心をしたそうであります。それは私が仙台に居り、家内がしばらく私の郷里に上の娘といいましても、それも死んでしまいましたが、それを小さい時連れて行つて居た時、その時でありました。自分がどうしても死ななければならんという、切羽詰つた問題になりまして、とにかくしばらく里に遊びに行くということにして貰つて、里には母親一人であります。その母親のところに行つて、然し機会を見て何処か身投げするにようなところを探して、身投げをしようと決心をいたしました。それは福島家のために身投げをする、自分が福島家を去つてしまつたならば、そして死んでしまつたならば、妹のイザコザもなくなるだろうと決心したのでありますけれども、その決心を誰にも云うことが出来ない、無論私の両親にも

云えない。里に帰つて里の母親にも云えない。私が仙台に居るためにそんな手紙など出したくない。たつた一人で自分は福島家をおだやかにするために死んで行くんだということになると、自分の心境を誰も知つてくれないのに一人で死んで行く。いよいよ身投げをする場面につきつめてみると、非常に淋しくなつた。その時になると、かねてキリスト教の信仰があると思つていたのが、何の力にならない。そして六月十七日といつていますが、近角先生のお話、先生の求道という雑誌に書いておいでになることがハツと心にひびいてきた。というのは、こういう風に、誰にも自分の心を打明けることが出来ずに、独り淋しく死んで行こうというものをドコドコまでもあわれんで下さるのが仏様であると教えて下さつた近角先生のお話というものが、その時生きて心にひびいてきたというのであります。

それから心持が変つて、身投げするというのをやめにして、妹がどんなにつらくあたつてきても、かえつて妹を哀れに思う、気の毒に思うというように変つてきたというのであります。その時が家内のキリスト教から仏教への転換であります。その間の詳しい事情は申上げられませんけれども、そうしてキリスト教から仏教に変つて来ますというと、家内の方が性格が鋭いのでありまして、今度は段々四十何年の間に、私の方がダジダジになつて参りましたのであります。私の欠点や弱点は四十何年見ているからよく分る、成る程そうであります。で、兎に角貴方は駄目なんでありますと、申します。それを言い解くすべはないのであります。

私は若い時から色々あやまつた道にも落ちておりますし何とも云いわけも何も出来ません。攻撃されると黙つて聞いているのであります。時にはあんなにひどく云わなくてもよいじやないかと思うこともあるのでありますが、本当のことを云うのでありますからして、何ともならぬのであります。そして仲々この頃になりますというと信仰上の御本なども読んで居りますし、向うの方が強いといつては悪いかも知れませんが、信心の上でもハツキリして来るのであります。私の方は攻撃されると攻撃されるままでいくのでありますが、然し初めはヒドイことを云うと思つて居りましたが、此頃になりますと、私の悪いところをこんなに云つてくれる者は、この世の中に他に無いのだろう、そうしますと矢張りこれは私の善知識といつてもいいかも知れないとそういうところまで行つているのであります。

そういうことが一方にありまして、善財童子の求道、盤夷女の説いた前生物語というものに何処かにひびくところはある。これはまあ思いますのであります。つまりどんなに云われても、この一つの親鸞聖人のみ教、仏陀のみ教と

いうところで、何処か両方がひびいている。私を散々のしつているのでありますれども、そこにそれじや貴方のような人は、何処か他所へ行つてお話をせん方がいいでしようと言いそうでありますが、そうじやないようであります。それは実際私の話すところを家内が何度か聞いたことがあるのでありますが、不思議なもので、貴方が話をするのを見ると、うしろから後光がさしているのを感ずる、というような面白いことを言うのであります。それは後光というのは私の後光じやありません、矢張り私の話を聞いても、私の話に仏様の光を感ずるのでありましよう。そういうことでありまして、私はヤクザな仕様のない奴でありますけれども、そのヤクザに何処までも無限のお慈悲をかけて下さる仏様のひかりというものは、ヤクザをとおしても自分は感じるということになるのでありましよう。そういうところをとおして、どうにか続いているような、一方から云えば惨めな有様であります。

私の方から云えば、それはまあひどいことを云うと思いますけれども、私の父の最後の時には、他の者の及ばぬ看病をして居ります。他の者が看病しても父は、いかん、農婦子でなくつちやならぬと言つて、私の家内が看病すると満足し、他の者が看病すると不満、そんなにして父は死んで行きましたものですから、これはまあ儒教の方の教であります。

親を見送つて、そして親の祭りを一緒にして行つた妻であるなれば、どんなことがあつても、その妻を離縁するということはあつてならぬものであるという教が孔子の教の中にありますが、そんなことでありまして、あんな風に父を見送つてくれたというようなことを考えますとこちらは別れようという心も無く資格も何も無いものでありますが、ずうつと続いて居りますのであります。

そんなことでありますからして、実際に、他の所はとびとびに読んでも、善財童子の嬰夷女物語というものになりますと、非常に心をうたれますものであります。

× × × ×

論　語

君子の交わりは、淡くして水の如く、
小人の交わりは、甘くして甘酒の如し。
君子は、淡くして以て親しみ、
小人は、甘くして以て絶つ。

仏かねてしろしめしてたのもしや

花田正夫

昨日の朝日新聞に、作家の佐多稲子女子の「還暦のおもい」の一文があつた。私も還暦を迎えたので、つい心ひかれて読んだ。

それは、人生六十年、暦を還えす年になつて、自分の姿を客観的に省みさせられることについてであつた。先ず自分の声について、一家中集つてテープレコーダーに録音して、これを披露すると、初めて自分の声を電気器具で聞いた人達が、この声は自分のと思われないと互いに問いただすが、他の人達は、当人の声としてそれを認める。すると、自分はこんな声で、こんな話方をするのかと眉を寄せて自己嫌悪におちた。

そのことを通して、自分というものを、自分が考えているものと、他にうつる自分というものが、可成り相違していて、しかも、他にうつる方がより客観的であるとなると、自己嫌悪はいよ〳〵深刻になる。

若い時には、他にどうつろうとかまわずに、われよしで行動したことが、今更に省みさせられる、矢張り客観的な自分の姿が知りたいと思う。

然しここで他人の目を鏡としてうつせば、他人の目も十人十色で、それが自分にはねかえつておるが、同時に自分の他人を見る目の不完全さもかえりみさせられる……。

その外のことも書いてあるが、大体こんなことであつた。

道元禅師は「正法眼蔵随聞記」に

「仏道を学ぶというは自己を知ることなり。自己を知るというは自己をはなるることなり云々」

といわれているのを思いおこす。

佐多さんは、自分のひとりよがりの世界の夢が破れて、更に正確な、客観的な自己を知りたいと願つていられるようである。そこで禅師は「自己を知る」には「自己をはなれる」ことの大切さを述べていられる。

「わがものと思えば軽し傘の雪」で、身びいき、身勝手な心に終始する我々は正しい自己評価は不可能である。

医師は、自分を含めて、自分に身近い、親子とか兄弟などの診断がむづかしいと聞くが、それは一喜一憂して冷静な判断がさまたげられるからだ。「他人ごとはよくわかる」と言うように、利害関係の割合にすくない間柄であれば、冷静な判断が出来るが、いざ肝腎な自分自身のことになると、さつぱり駄目で、これ程難渋することはない。時にうぬぼれてうかれあがり、時にへこたれて沈みこむ。やすろうことのない目まぐるしさである。古歌の

水の上に絵を書くよりもはかなきは
おのがこころをたのむなりけり

である。ここに「自己をはなれる」ということが必要となる。そこで先ず他人の言葉に耳を傾けるということが問題になる。

蓮如上人は、どんな人がどんなにひどいことを言つても一応は聴き入れてよく省みなければならぬ。また自分の悪いことを蔭であつても言つてくれたなら、それを無駄にしてはならぬ、といましめていられる。

ところが身びいきの強い、うぬぼれのかたまりともいうべき我々は、「自分はそんな者じやない」と拒否して、自分で作つたひとりよがりの自己の偶像にしがみついて、それを死守する。

ここに福島先生から承つたことを想い浮べる。それは

「私は、自分以上に評価する人の前に出ると、すぐ外面を飾り、偽善におちる。反対に、自分以下に評価する人の前に立つと、強い低抗を感じて、その人の言うことを受け容れない。その様にどちらにも落ち着けないが、自分の長所も短所も正しく知りつくして、しかもその全体の自分を温い心で包んで下さる親の前に出るとき初めて落着くことが出来る」と。

大体こうした意味であつたが、成程とうなずかされる。

さて、自分が見る自己、他人が見る自己、そして親の眼にうつる自己について述べたが、私はここに、仏の御眼にうつる自己ということを述べよう。

仏の智慧を大円明鏡にたとえられる。よくみがれていて、微塵の曇りも、凹凸もない澄みきつた大きくまるい鏡には一切の形相がそのままに、柳は緑、花は紅とあるがままの形像がうつる。このような智慧をもつて、一切衆生の身心のすべてを知りつくされた仏は、そこにうつる我々の苦悩の姿を、「われ一人の苦」とお感じ下さつて、慈悲のこころのやむ時なく、仔牛が母牛に随逐してやまぬ如く、無限の大悲心をもつておさめすくうて下さることがきわまりがましまさぬのである。

私共は、この仏智の光明に照らし出され、その隅々までさ

し延べて下さる大慈大悲のたのもしさに、浮沈、悲喜の流転漂没のやむことのない身も、ついのよるべを恵まれるのである、恰もそれは、親の家につれ帰らされた迷い子が、初めて大いなるやすらぎとよろこびを覚えるように。

さて仏心にうつる我々の姿を何処で見出すかと申すと、もつとも詳細に『大経』の五悪段に見出される。

第一の悪とは殺し合う世界、第二の悪とは欺し合いの世界、第三の悪は男女の交際の乱れ、第四の悪は権力をふり廻して人を牛馬のようにあつかうこと、第五の悪は親にそむき、大酒を飲み、バクチを打つという姿である。この狂態、邪態は内に八万四千の煩悩を持つた我々が、さるべき業縁に催されて織りなして行く罪業の数々で、他人ごとではない。

然しこの五悪をお説き下さる釈尊のお心は、その罪業の我等に、呆れ、捨て、責める、というところは微塵もなく、その我等のために「一心に意を制し、身をただし、行を正しくして」御心をくだいて下さるのを拝する。

このことは、親鸞聖人が、畢生の宝典『教行信証』の一番肝腎な信巻に、

「如来の思召しは、はかり知ることができない。然しながら、謹んでこの思召しを推しはかるに、すべて我々は、無始より今日ただいまにいたるまで煩悩にけがれて浄らかな心はなく、うそいつわりでまことの心はない。この有様を見そなわし給う阿弥陀仏は、一切の苦しみ悩む衆生を憐んで、はかり知ることのできぬ永い歳月かかつて、菩薩の行をなされた時、わずか一念一刹那の間も清浄でなかつたことがなく、真実の心でなかつたことはない云々」

と信嘗せられている。

更に、仏の御眼にうつる我々の姿をとかれてあるのが、『観経』である。法然聖人は、その御釈の中に、『観経』は一切の善悪の凡夫の救済を説かれている経典であるが、とくにその中で下品の機、十悪愚痴の者の救済せられるところを指摘されて

「この品、最も要なり。すこぶる我等が分に相当せり」

と、そこに聖人御自身の姿を発見せられては、生涯十悪愚痴の法然房と懺悔せられつゝ

「余が如き下機の行法は、阿弥陀仏の因位の昔、かねて定めおかるるをや」

と随喜の涙の中に、選択本願念仏の玄意を得られたのである。

尚、源信僧都『往生要集』の中に、

「下機の三生は別の階位なし。ただこれ具縛造悪の人なり……。下品の三生〈十悪、破戒。五逆の徒〉はあに我等が分にあらずや」

と、法然聖人と同様、、下品の悪機のところに、仏の御眼にうつる自己の姿を発見されて、「余が如き頑魯の者」と懺悔されつつ「極重悪人、唯仏の名を称えよ」の大悲招喚の悲心を随喜していられる。

このように、源信僧都、法然聖人、親鸞聖人と、規を全く等しくされて、仏智のひかりに自己の真相を発見せられその全体をおさめて下さる大悲の心光中に逍遙していられるのを拝する。

私はあえて云う。自分の虚飾を破つて真の姿に気づくことは非常に大切であるが、そのことが可能であるためには、その全体を護念し摂取して下さる方ましまさねばならぬということである。

明治卅年頃に亡くなつたドイツの哲人、ニイチェは、不朽の名著であり、日本人に非常にしたしまれている著書

『超人』の始めに

「君がたが体験し得るもののうちで、一番大きなものは何か。それは大いなる蔑視〈みさげはに〉の時だ。君がたの幸福も、理性も、道徳も、からきしつまらないものになつた時だ……」

と述べている。然し、どんなに大きな体験であるにしても自分を見下げ果てただけでは、悲惨な価値破壊におわる。

だからニイチェ自身は、狂い死同様の中に生涯の幕を閉じている。そこはあまりに暗く、あまりに冷たく、我々は窒息するより他ないところだから。

又、自分の姿をたとえ知られていても、それを責め、退けられる世界には我々は落着けない。苛酷な相対道徳の世界の不安さは随所に見られるところである。

唯一無二の光明は、我々の全体、善も悪も、短所も長所も、その隅から隅までを全理解して、その故に大悲心を成就して下さる阿弥陀一仏からさしこんで下さるのである。

この仏の御理解と御同情を我々の信の生活の上で明らかに教えられるのが、歎異抄の九章である。

唯円房が念仏は申して居りながらも、よろこびの心がおろそかで、浄土へ急きまいりたい心もおこらぬことを悲歎

して、聖人の御前に心底を打ちあけたとき
「よろこぶべき心をおさえて喜ばせないのは煩悩のせいである。しかるに仏はかねてこのことを知ろし召されて、煩悩にかけてはかけ目のない身よと見抜いて下さつているのだから、如来の大悲の本願は、かくの如き我等がためであつたと知らされて、いよ／＼たのもしいことである……また急ぎ浄土へまいたい心がなくて、現実に執着しきつて、万策つきて、力なく死ぬより外ない我等を誰にも増して、とりわけても不憫に思召して下さるのだから、いよ／＼たのもしく、おたすけに間違いないと知られる云々」
との聖人の御返答、教えるというのでなく、何処までも、御自身の上に御述懐下さるお言葉、まことに大智と大悲の至極を仰ぎ、ここに、親の家にひき入れられた迷い子がやすらぐように、大悲大願のたのもしさに、人生百年、光悠々を謝しまつることである。

昭和三十九年六月十九日、兄の忌日に。

× × ×

二羽のオームの物語

ジャータカ物語より

はるかな遠い昔、印度のハラナと言う国で、一人の猟師が、深い森の奥に住んでいた二羽の兄弟のオームを捕えて王様に献上いたしました。王様はこれを大そう大切にして、黄金の籠に入れ、この上もない結構な御馳走を食べさせたり砂糖水を飲ませたりして飼つておりました。
すると又一人の猟師が一匹の黒腕と呼ばれる大きな黒猿を捕えて王様に奉りました。そこで珍しさに今度はその黒猿がおいしい食物を十分に与えられて大事にされるようになり、それに引きかえて、前の兄弟オームは、今はまずい食物をあてがわれるのみでかえりみられなくなつてしまいました。
併し兄のオームは賢い智慧を持つておりましたからこの事をとやかくは言いませんでしたが、弟のオームはあとから来た黒猿がもてはやされ大切に扱われるのを見て我慢がならなくなり、ある日兄に不平をもらしました。
「兄さん、以前はこの王宮にあるおいしい食物は皆私達

がもらいましたのに、今はすつかり黒猿の所へ持つて行つてしまうようになりました。私達は王様に大切にされないどころかろくな物も与えられないではありませんか。こんな所にいて何になりましょう。さあ生れ故郷の森へ帰りましょう。」と。
これを聞いて兄オームは詩をつくつてうたいました。

得ると得ざると、名誉と不名誉と
褒めらるるとそしらるると、苦と又楽と
これらは人間界にては常なき法なり
憂うるなかれ、弟よ、何故にか憂うる

これを聞いて弟の言いますに、
「ああ、兄さん、あなたは賢くて、眼に見えない真実を知つておいでです。それゆえ心は安らかです。けれど私は口惜しくてなりません。どうしたらあの猿めを王宮から追い出すことが出来るでしょう。」
そこで兄は再び弟に説きました。
「あの猿は今にを耳動かして尊大な様子をして見せたり、ムフンムフンと賤しい声を出して王子達をこわがらせるだろう。そのような事をするものが長く重んぜられる筈がない。彼はみずからの行為で追い払われる時が来るだろう。」と。
はたして数日の後黒猿は幼い王子達の前で、恐しげな姿をして見せたりすごい声を出したりしておびやかしましたので、王子達は皆こわがつて泣き声をあげました。それを見て王様は驚き、これはとんでもない獣だと言つて猿を追い払わせました。そしてオーム達は再び以前のように大切にされるようになりました。
これはお釈迦様が竹林精舎におわしました時、お弟子方が集つて、ダイバダツタがお釈迦様に対して犯した罪によつて尊敬も布も受けられなくなつた事を話し合つておりました時に、お弟子方にお説きになつた御法話であります。
そして説き終られて後に、
「その時の黒猿はダイバダツタ、弟オームは阿難、兄オームは自分であつた。」
と仰せになりました。

× × ×

あとがき

三伏の夏となりました。暑中お見舞申上げます。蓮如上人はこの夏の季に、仏陀御在世中の夏安居をしのばれて、「夏の御文」を作られて、求道の栞にせられました。

○

さて昨年以来、有縁の方々のポツリ〳〵と亡くなられました御知らせを受けることがしきりで、その都度に、御生命にかけての御警告を頂いてをります。

「今日も人の死ぬ日にてそうろう」

とは、真田増丸師の常に称えられた一句でありますが、先生にそのことをおききすると

「わしが何時も無常を忘れるから何時も言うのじや」

と申された由であります。

長崎市で療養所と病院をいとなんでいられます、高原憲先生は、

何もかもわれ一人のためなりき
今日一日のいのち尊し

の一首を病者にも示され、御自身にも繰り返していられます。からだの医師は多くてもこころの医師のまれな世にあつて、二つをかねられた有難い国手であります。

○

△ 近角先生の教行信証の欲生釈は終り、大心海釈を引続いて頂きます。聖人の御勧め下さる大信心の絶対性を存分にお知らせ下さることであります。先日も高松市の長岡さんがお来庵下さり、「近角先生は原稿を非常に注意しておしたためになつて、信界建現誌の御発行の時も、一番数多く読むのは自分だろう、とおつしやいました」等々伝え承りました。

△ 橘池翁の「仏智不思議をそのままに」は、もう翁が亡くなられて満七年の今日、遺徳を慕い、教を乞う心でいただきました。信心開発と共に、御生涯を念仏一筋に貫かれ、多くの人々の同行の善知識となられましたことはすでに柳瀬先生から御紹介下さつた事であります。

△ 福島先生の「善財の求道」は、いよいよ福島先生御自身のお家庭の上にひきあてて御信味下さいました。昔から「身辺三尺は如何なる知恵者も暗闇である」と言われますが、この万人の持つ盲点に、浄土の光の影を拝し得て申しようもなく心うたれます。

△ 「仏かねてしろしめして…たのもしさ」の拙稿は、人生ひとりポツチにあつて、全理解者一人ましますことのたのもしさの一端をしるしました。グアム島に生き残つた日本兵二人が、山にかくれての幾年月、その時、友が病気するなどの時の淋しさ、たよりなさ、それは多勢て生活している間は想像もつかぬ、死にもまさる苦しさであつた、との述懐を今更に思い浮べて居ります。

○

御案内

一道会法話会。第一日曜、歓異抄。第二日曜、正信偈。第三日曜無題。午后一時半。市電新郊通り一丁目下車。

毎月二十四日、午前午后。市内昭和区小桜町、教西寺、法話会。市電御器所通り下車。桜花学園東。

定価一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）

名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光　第十六巻　第七号　昭和三十九年七月十五日　発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可